

実践報告 言語活動を取り入れた授業づくり

正確に聞き取り、論理的に伝えよう (国語表現)

実践報告者 長崎県立西彼杵高等学校 教諭 白石愛子

1 科目名・単元名

- ・科目名 国語表現（3年生）
- ・単元名 正確に聞き取り、論理的に伝えよう（話すこと・聞くこと）

2 単元の目標

- ・相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合おうとする。（関心・意欲・態度）
- ・相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合う。（話す・聞く能力）（指導事項の（1）のイ）
- ・国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などについて理解を深める。（知識・理解）（指導事項の（1）の力）

3 取り上げる言語活動と教材

- ・言語活動 特定の議論に対して対立する二つの考えを想定し、その根拠を論理的に話したり、正確に聞いたりする。（言語活動（2）のア）
- ・教材 「ディベートをする」（「改訂版国語表現」第一学習社）

4 単元について

言語事項に関して、3年Aコースの生徒は1・2年次に意見文の作成・発表等で年2～3回「書くこと」「話すこと・聞くこと」を行ってきた。3年生になって「国語表現」になり、1学期には新聞形式で日本語の特徴について調べたことを発表させたり、新聞投稿を目指して意見文を書かせたりした。また夏休み～9月にクラス詩を創作させ、群読での発表を行わせた。これらの活動により、生徒は事前に準備した自分の意見を人前で発表する力をつけてきた。

本単元では、ディベートの定義やルールについて学び、自分の主張に根拠を伴わせる訓練を通して論理的に話す力を身につけさせたい。また実際にディベートを行わせ、対立する二つの考えについて、どちらの考えについてもなぜそうなるのか根拠を客観的に分析した上で、相手の主張をよく理解し的確に反論する力を身につけさせたい。このような体験は、生徒が卒業後社会人になって実社会で交渉する際にも役立つものと思われる。

5 単元の具体的な評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	知識・理解
相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合おうとしている。	相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合っている。	国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などについて理解している。

6 単元の指導計画

時	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
1	<p>○ディベートの定義や討論形式を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書の「ディベートをする」を読み、ディベートの討論形式や留意点について理解する。 具体的なディベートの場면을DVDで視聴する。 	<ul style="list-style-type: none"> 指名して読ませる。 DVDは適宜早送りして、流れを見せる。
2	<p>○自分の主張に根拠を伴わせる訓練をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2人一組になり「いいところ3つゲーム」を行う。 <p>○互いに対立する主張に理由付けをする訓練をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 三角ロジックによる「具体的な事実→理由付け→主張」の論の組み立て方を学び、相反する主張の理由付けを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 比較対照になる二つのものを問題として考えさせる。 例「みかんとりんご、みかんのいいところ3つ」等の問題 質問者には客観的な根拠を1分以内に答えさせる。 具体例 ○○高校は男子校→() →大学進学に有利・不利である
3	<p>○プチディベートを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書の「小・中学校の給食は廃止すべきである」を役割を決めて読む。 「給食」の反対尋問と最終弁論を考える。 何人か発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 役になりきって読むように指示。 プリントに記入させる。
4	<p>○プチディベートを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 6人の班を作り、「学習のテーマ」の論題について、賛成と反対の二つの立場でその理由を3つずつ考える。 賛成派反対派に分かれて班で発表する。 いくつかの班の代表がクラス全体に向けて、立論を発表する。 時間があれば反対尋問・最終弁論まで班で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> P113学習のテーマから1つ選ばせる。 「年賀状廃止」「ペットボトル廃止」「18歳選挙権」「総理大臣選挙制」 「ディベートフローシート」に自分や相手側の立論や反対尋問の内容を書き取らせる。
5 ～ 6	<p>○本格的なディベートに向けて準備を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校生の携帯電話の必要性について賛成・反対の立場から立論・反対尋問を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「高校生に携帯電話は必要か否か」をテーマにして準備させる。 (1時間はパソコン室で調べさせる。)
7	<p>○ディベートを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校生の携帯電話について賛成派反対派各4人、司会・計時各1人、その他は審判団という形に分かれてディベートを行う。 審判団の診断 評価シート完成 	<ul style="list-style-type: none"> 立論4分ずつ・作戦タイム2分・反対尋問4分ずつ・最終弁論3分ずつ (移動も含めて計30分で予定) 診断5分 まとめ・指導者による講評13分

8	○前時までのディベートについての全体のまとめ・評価を行う。	・ディベート自己評価シートに記入させる。その際、「いいところ3つ」「三角ロジック」「プチディベート」は一緒に組んだ相手にも評価させる。シートはノートに貼って提出させ指導者が評価する。
---	-------------------------------	---

7 本時の指導

(1) 本時の目標

実際のディベートを通して、特定の議論に対して対立する二つの考えを想定し、その根拠を論理的に話したり、正確に聞いたりする。

(2) 本時の授業展開

過程	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
導入 2分	・ (チャイム前に座席等の準備をしておく。)	・ ディベートを始める形態が整っているかの確認後、司会にバトンタッチする。
展開 35分	・ 高校生の携帯電話の必要性について賛成派・反対派各4人(立論・質問・回答・最終弁論)、司会1人、その他20人は審判団という形でディベートを行う。 ・ 審判団の診断	・ 立論4分ずつ・作戦タイム2分・反対尋問4分ずつ・最終弁論3分ずつ(移動等も含めて計30分で予定) ・ 審判には「ディベートフローシート」に賛成派、反対派両方の立論や反対尋問の内容をできるだけ詳しく書き取らせる。(前時に指示済み) ・ 診断5分 審判は「ディベート評価シート」に基づいて、立論・反対尋問・最終弁論・全体で各5点満点で採点する。合計点の高い方を勝ちとし、審判団の多数決で勝敗を決めさせる。
まとめ 13分	・ 評価シートに評価・感想を書く。	・ 記入時間5分 ・ 何名か感想を聞いてみる。3分 ・ 指導者による講評5分

(3) 本時の評価

実際のディベートを通して、特定の議論において対立する二つの考えを想定し、その根拠を論理的に話したり、正確に聞いたりすることができたか。

(4) 言語活動と「話すこと・聞くこと」の力の向上を結びつける工夫について

これまで「現代文」で何度かディスカッションを主体としたディベート(「性善説と性悪説」「原発是か非か」)を行っていたが、今回は正式な形のディベートを行うことで、緊張感を持って相手の話を「聞く」ことや相手を説得するための論理的な根拠を「話す」ことを身に付けさせたい。「高校生に携帯電話は必要か否か」についてのディベートを行う際は、裁判のようなイメージでそれぞれの生徒に自分の役割を把握させて、臨場感を持たせるようにする。

(5) 「言語活動」を取り入れた授業の成果と課題

7時間目に正式なディベートを行わせ、その評価まで行わせた。「(6) 生徒の感想」に示すように、普通の読解中心の授業とは違う充足感を得たようだ。普段あまり発言しない生徒ががんばって4分の立論を作り上げて発表したり、おとなしい生徒が審判役としてしっかりと双方の立論を聞いて論理的に判断したりしており、生徒は楽しんで「話すこと」「聞くこと」ができたと思う。

ただし、7時間目だけで終わると、全体のまとめができないと思い、もう1時間使って、全体の自己評価・他者評価とノート整理をさせ、それをもとにして指導者による評価を行った。また、定期考査でディベートの内容について振り返らせ、それによっても評価したい。

今回の評価方法について客観性があるかどうか若干の不安があるが、このことは他の「言語活動」においても同様で、発展的な「言語活動」をどう評価するかは難しい問題であると思う。

(6) 生徒の感想

○立論班の生徒

- ・私は立論を言う役割でしたが、4分の時間を使い切れなかったのが少し悔いがあります。でもみんなと協力してまとめることができたのでよかったです。
- ・反対尋問でA組よりもたくさん質問をすることができ、数人でも審判を納得させられたのでよかったです。
- ・まとめるのが難しかったが、尋問の内容もまとめて最終弁論が言えてよかった。

○審判役の生徒

- ・立論の人が速くて、聞き取って書くのが大変だった。
- ・反対尋問で思いがけない質問が来て戸惑っていたので、やはり難しいんだと思った。また尋問する側だったら、どういう質問をすれば相手に有利かというのを考えるのも難しそうだった。
- ・本番のディベートでは裁判みたいな感じでした。
- ・ディベートは中学校でも何度かしましたが、今回本格的なディベートをしてみて、雰囲気の違い戸惑いました。
- ・質問の時にA組はけっこう攻められて答えられない部分があったので、作戦タイムで4人で話し合ってから言った方がいいと思った。
- ・またディベートをする機会があれば、審判ではなく前で発表をする側になれると思う。

○司会役の生徒

- ・今回司会として参加して時間を計りながら聞いていたが、やはり時間いっぱい使って発言した方が説得力があると感じた。とっさの受け答えで印象が変わってくると感じた。

○全体の感想

- ・自分が考えていなかったことを聞かれたときに、すぐに考えて的確にまとめて説明するのは難しいが、これから先そういう力も必要になると思うのでしっかり身につけたい。
- ・自分の意見を相手に伝えるだけでなく、相手が納得できるような意見を考えいけないうのが大変でした。
- ・自分の意見を相手に言うことも大事だが、相手の言っていることをきちんと聞いて質問するのも大事だと思った。こういうことは社会に出てからも役立つので、いい訓練になった。
- ・ディベートの授業を振り返って、相手を説得するためには様々な情報を集めてわかりやすくまとめ、相手に納得してもらおうのが大変で難しかった。

「言語活動」を取り入れた本実践の工夫とポイント

1 「話す・聞く」能力を高めるディベートへの取組

本実践では、「相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合う」能力を高めるためにディベートを活用しています。ディベートは、あるテーマについて与えられた立場で客観的に考察を加えたり問題点を指摘し合ったりすることができるので、生徒が自分とは異なった考えの理由に気付いたり自分の考えの論拠の妥当性を見直したりしながら相対的なものの見方や考え方を獲得していく上で効果的な方法です。単元の最後に与えられたテーマは「高校生の携帯電話の必要性について」という生徒にとって身近な取り組みやすいもので、生徒全員が、賛成派、反対派、司会者、審判団に分かれて主体的に授業に参加できるように設定されています。

2 段階的な単元の指導計画、「プチディベート」の工夫

本実践では、いきなり本ディベートを行うのではなく、目的に応じた「プチディベート」を差し挟みながら、ディベートに必要な知識や態度、能力を段階的に習得できるように工夫されています。単元の導入段階では、具体的なディベートの場面をDVDで視聴させたり、訓練にゲームを取り入れたりするなど、生徒の意欲や関心が高まるような工夫も見られます。

3 「伝え合う場」をどう設定したか

プチディベートでは、班で選択したテーマに対する賛否の理由をどちらも協議して複眼的なものを見方を広げ、問題を相対化しながら論理的思考力を高めていくことができるように伝え合う場が設定されています。本ディベートは、正式のディベート形式にもとづいた本格的なもので、「高校生の携帯電話の必要性について」というテーマに対する賛否について、様々な資料や見解を引用しつつ、相手側の論拠の課題等を指摘しながら自らの立場の説得力を高めていくといった活動になっています。また、審判団となる生徒は「ディベート評価シート」をもとに採点し、基準をもとにしながら「聞く」力を高めることができるように工夫されています。実際の授業では、質の高いディベートが展開され、優劣の判断は一方に偏ることなく客観的かつ冷静に行われていました。

4 本実践の意義と活用の留意点

本実践の成果について、白石教諭は「立論力」や「論理的判断力」の向上とともに「生徒は楽しんで『話すこと』『聞くこと』ができた」と振り返っています。また、生徒の感想の中には「こういうことは社会に出てからも役立つので、いい訓練になった」というものがあります。本実践は周到な単元計画にもとづくディベートへの取組を通して、「論理的に話す・聞く能力」を高め、国語表現のねらいである「社会人としての生活に生かすことのできる国語の能力」の向上に結び付けることができたという点で意義があります。

本実践を活用する際の留意点としては、

- ①ディベートを実施した後の評価やフォローの時間を適切に確保すること
- ②客観的で妥当性のある評価方法を確立すること

が挙げられます。ディベート指導の経験がない先生方でも、手順を踏めば十分に学習効果をあげることができます。本実践を参考にしてぜひチャレンジしてみてください。